

# 直腸がんによるストーマ保有者の 装具交換の自立とストーマ周囲皮膚障害に関連する生活上のリスク要因

## 要旨

### 目的

直腸がん患者の高齢化ならびに在院日数の短縮は、退院後のストーマ装具交換に介助が必要なストーマ保有者を増加させている。加えて、治療の進歩に伴うイレオストミー造設や化学療法の適応の拡大により、ストーマ周囲皮膚障害になり易いストーマ保有者も増加している。

本研究の目的は、ストーマ保有者の生活の質に影響するとされる「装具交換の自立」と「皮膚障害」の関連要因から、ストーマ保有者の生活上のリスクを記述し、それに応じた支援を提供するためのストーマ外来の機能について考察することである。

### 方法

首都圏にある1特定機能病院の2008年～2014年にストーマ造設術を受けた直腸がん患者101名の診療記録を対象とした。対象の属性ならびに臨床的な変数について、記述統計を算出し、「装具交換自立」「皮膚障害」との関連について検定( $\chi$ 二乗・t)をした。有意差がみとめられる変数でロジスティック回帰分析を行った。統計解析には、SPSSVer.21を用いた。

### 結果

ストーマ保有者は、コロストミーが44名、イレオストミーが57名、計101名であった。一時的ストーマが51名であり、永久ストーマが50名であった。年齢の中央値は65歳であり、配偶者のみとの同居46.5%、独居9.9%であった。BMI26.5以上の肥満者が9.9%、高血圧または心疾患21.8%、糖尿病14.9%であった。術後入院期間が2週未満の者は、術後8週以内のストーマ外来利用が多かった。

術後8週未満において、装具交換自立困難者は33.7%、皮膚障害が認められる者は36%であった。ロジスティック回帰分析により、自立困難には「65歳以上の高齢者」(オッズ比7.193)と「糖尿病罹患患者」(オッズ比11.824)、皮膚障害には「イレオストミー」(オッズ比3.101)と「化学療法」(オッズ比2.483)がリスク因子として抽出された。抽出された4リスクを組み合わせ、ストーマ保有者の生活のリスクを「タイプⅠ:生活維持・向上」「タイプⅡ:生活維持・懸念」「タイプⅢ:生活縮小」「タイプⅣ:生活制限」に分類した。

### 考察

タイプ別のストーマ保有者の生活上のリスクとそれに応じた対応について考察した。ストーマ外来では、術後2か月以内3回以上の自立支援、術前の家族を含めた包括的なアセスメントおよび治療や生活の場の選択等を意思決定できるような支援、在宅での医療福祉チームと連携した継続支援などの必要性が示唆された。

### 結論

直腸がんによるストーマ保有者は「化学療法」と「イレオストミー」がリスク因子となっている「皮膚障害」ならびに「65歳以上」と「糖尿病」がリスク因子となっている「装具交換自立困難」のどちらかもしくは両方の問題を生じ易い。ストーマ外来は、術前の包括的なアセスメントおよび意思決定支援、退院後早期の頻繁な自立支援、地域の医療福祉チームのリソースとしての機能の必要性が示唆さ

れた。